

薩摩半島におけるノジギクの分布及び生育環境について

立久井 昭 雄*

Distribution and Habitats of *Dendranthema occidentali-japonense* in Satsuma Peninsula

Akio Tachikui

鹿児島県本土に自生しているキク属 (*Dendranthema*) は、シマカンギク *D.indicum*、ノジギク *D.occidentali-japonense*、サツマノギク *D.ornatum*、イワギク (チョウセンノギク) *D.Zawadskii* var. *latilobum* の4種である。ほかにサツマノギクを基本種とするオオシマノジギク、ノジギクとシマカンギクの雑種と考えられているシロバナシマカンギクがある。これらのうちシマカンギクは済州島、台湾、中国に分布し、日本では近畿、中国、対馬、九州に分布している。本県では長島、甌島、鹿児島市、福山、桜島、根占、金峰山、野間岳、久志、笠沙、屋久島、種子島に生育している。ノジギクは四国、九州の海岸近くに生え、本県では薩摩半島東部～南部海岸、大根占、佐多、辺塚、竹島、種子島に分布している。サツマノギクは薩摩半島西海岸、甌島、宇治群島、屋久島、トカラ列島に分布している。チョウセンノギクはイワギクの一型で、朝鮮、中国北部、モンゴルに分布し、日本では九州の一部に分布している。本県では大浦町磯間岳の集塊岩上だけに生育している。オオシマノジギクは、奄美大島、徳之島、喜界島に分布している。これらの分布略図を図1に示す。

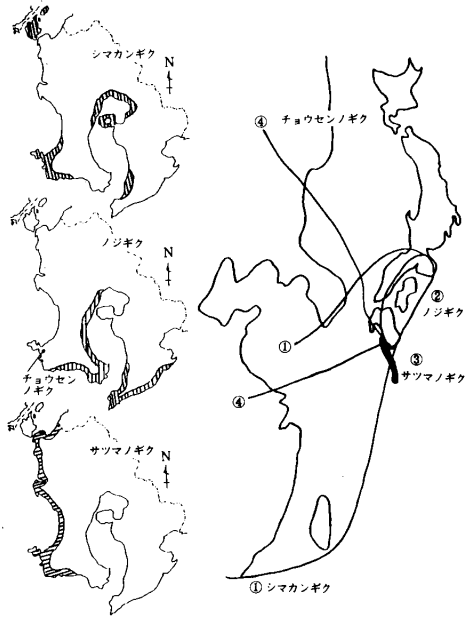


図1 キク属4種の分布略図

筆者は1990年、キク科植物の資料収集・調査を県内各地で行った。前報では県本土で最も多くの自生が見られ、町花ともなっている笠沙町でのサツマノギクの分布と生育地の環境について報告したが、本報ではノジギクの分布—海岸から山地へかけての分布状況と生育環境—について、開花時期である1990年11月3日から12月3日にかけて調査した（主として穎娃町）のでその一部を報告する。

1. ノジギクの形態

ノジギクは花の色や形がサツマノギクと酷似しているが、本県における両種の混生地は枕崎市一帯にしかない。

- ① 茎 —— 地下茎から多くの地上茎を出し、上部でさらに分岐し、基部は横に這うか下垂する。上部は斜上し、40～50cmの高さとなる。b 2地点 (図3) での調査では、1株から41本の地上

*〒892：鹿児島市城山町1-1 鹿児島県立博物館

莖が出ていた。花の終わった頃から地下莖を伸ばし、翌春に再び成長する。

- ② 葉 —— 指宿市大迫で採集したもので図2のような形をしており、表面には毛が少ないが裏面には丁字状の毛が密にあって灰白色をしている。サツマノギクの葉も形は似ているが、裏面にある丁字状の毛がもっと密で銀白色となり、表から見ると葉のふちが白く色どられている。



図2 葉の形と裏面の丁字毛

- ③ 花 —— 11月の初め頃から咲き始めるが、本県は気候が温暖なため1月に入っても咲いているのを見ることができる。花の大きさはサツマノギクに比べるとやや小さい。

2. ノジギクの海岸から内陸部への進入状況

(1) 調査日 1990年11月19日

(2) コース概況

ノジギクの海岸付近から山地への分布状況を調べるのに適したコースとして、生見海岸～大野岳～千貫平間(図3)を選んだ。このコースはサツマノギクの混生がなく、樹林もやや良好な状態で残されており、標高は0～500m程にわたり斜面、崖、耕作地、草地と変化に富んでいる。車でこのコースを走り、生育地では群落調査を中心に実施した。

・A～B

標高0～300mあり、斜面の多くは耕作地となっているが、部分的に照葉樹林、スギ林も見られる。道路の両側は2～3mの土手になっている部分が多く、この土手にノジギクが生育している。

・B～C

標高200～300m程で緩やかな台地となっており、茶の栽培を主とする耕作地が広がっている。ノジギクは耕作地境の土手に見られ、群生している場所が多い。

・D

標高466mの大野岳で、頂上近くの神社まで車で行ける。マテバシイ、イタジイ、タブノキを主とした照葉樹林とゴキダケ林があり、ヒゴスミレ、タムラソウなどが生える草地も広がっている。ノジギクは道路沿いの斜面や神社周辺の草地に見られる。

・E～F

道路は烏帽子岳(363m)斜面の南～東にかけて、標高200～120mの部分を通っている。鳥越隧道付近が標高200m程あり烏帽子岳側は垂直に近い崖となっている。b1付近は標高120m程で照葉樹林、スギ林、耕作地などとなっている。ノジギクは道路脇の崖や日当たりの良い土手に見られる。

・F～G

海拔120～480mあり顛娃町、喜入町、指宿市境の稜線に沿って走っている。沿線には、イタジイ、タブノキ、クロキ、マテバシイなどを主とする照葉樹林や耕作地、草原がある。ノジギクの生育地はa1の1カ所だけであった。

以上が調査コースの概況であるが、ノジギクの生育が見られなかったのは、照葉樹林や人工林による陰地、二次林やゴキダケ、ススキの繁っている場所である。

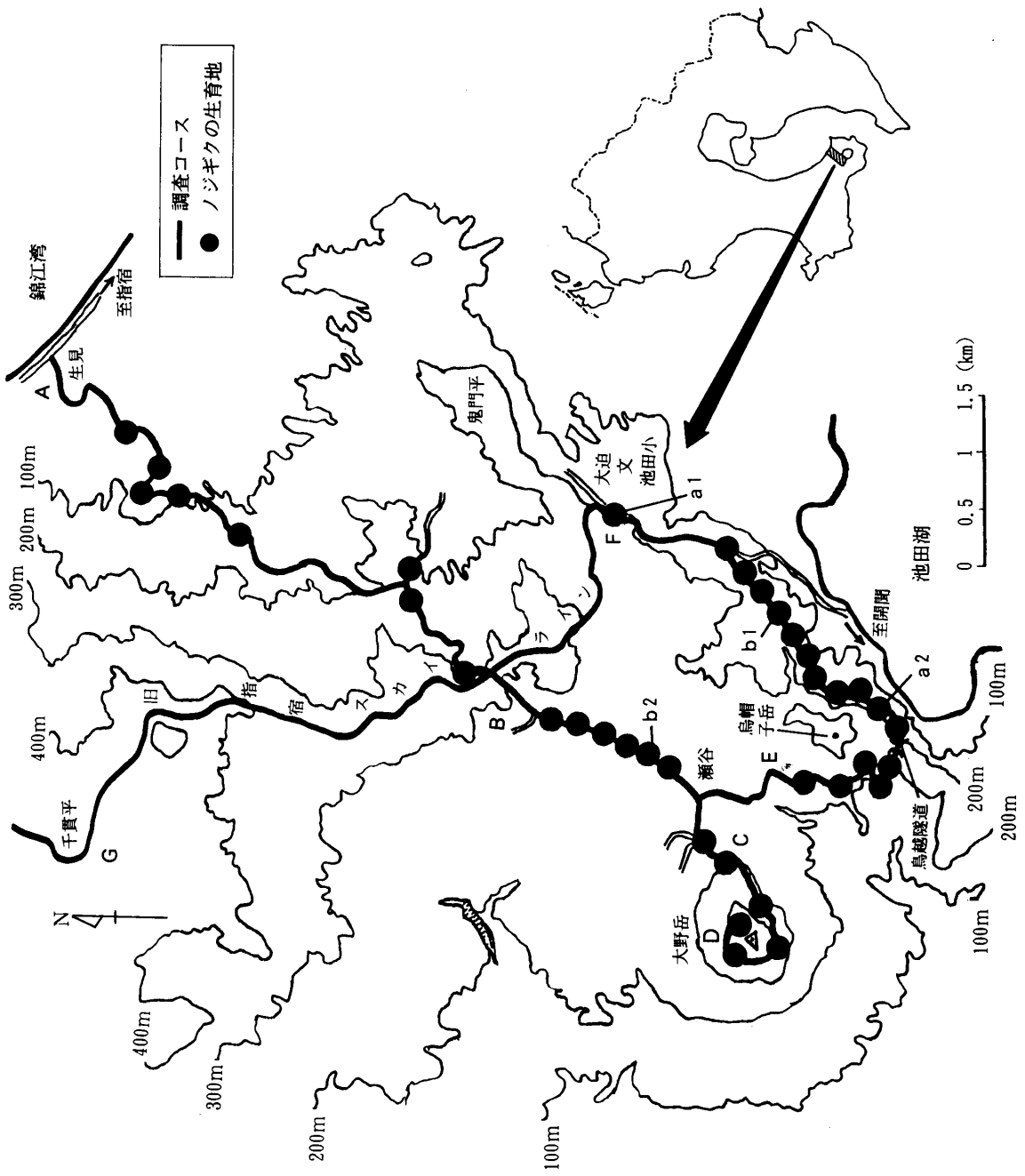


図3 調査コースとノジギクの生育地

(3) ノジギクの生育環境

生育環境は、a 1, a 2—セメントで固められた場所と b 1, b 2—土の場所に大きく分けられる。これらの地点でノジギクとの競争や協調の状況を知るため周囲に見られる植物を記録した。各場所の様子については、写真では種の区別が困難なため図を使い、見られた植物の全てを記載してある。

・セメントで固められた場所

a 1

地形——道路を通すために山の斜面を削り、下部はセメントの石垣、上部は吹きつけとなっている。土はほとんど無く、ノジギクは石垣と吹きつけの境や吹きつけの凹部に生育している。斜面の最上部は自然の状態が残されている土の部分である。

植物——イヌビワ、ヤマハゼなどの低木が見られるが、吹きつけの部分にはつる植物が多く下垂している。土がほとんど無く常に乾燥状態にあるなど生育環境としては非常にきびしいが、背の高い植物の侵入が不可能なため日当たりも良くノジギクにとっては安定した生育地と考えられる。

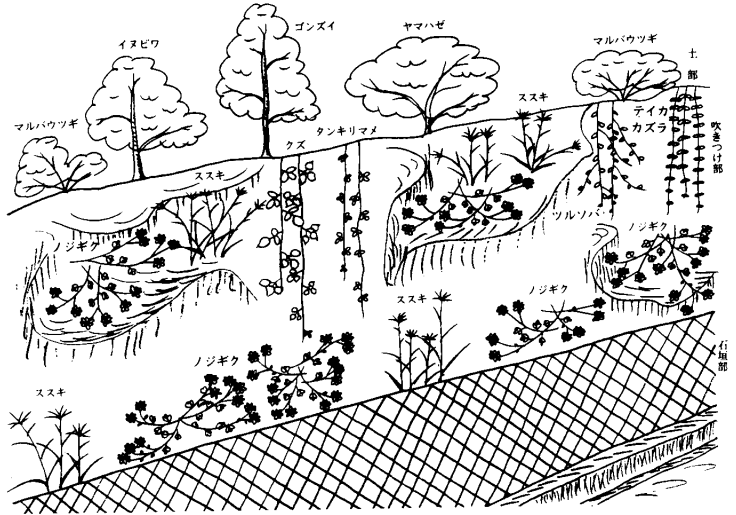


図4 a 1地点の群落のスケッチ

見られる植物——木本

ゴズイ、マルバウツギ、ノイバラ、ナワシロイチゴ、ヤマハゼ、テイカカズラ、イヌビワ、ハウロクイチゴ

草本

ススキ、クズ、ツルソバ、タンキリマメ、ヘクソカズラ、ヤクシソウ、センニンソウ

a 2

地形——烏帽子岳の南東側急斜面を削って道路を通してあるため、垂直に近い崖となっている。崩落を防ぐためセメントが吹きつけてあり、その上にさらに金網がかけてある。この崖は高さが10m程で幅10mを調査した。植物にとって日当たりが良いこと以外非常に厳しい環境と思われるが意外と多くの種が生育している。大きな環境条件の1つとして高さ363mの照葉樹林に覆われた烏帽子



図5 a 2地点の群落のスケッチ

岳があるため、水分が割合に多いことがあげられるであろう。晴天続きの日ではあったが所々から水がしみ出し、吹きつけてあるセメントの表面が濡れている場所が見られた。セメントの吹きつけは起伏が激しく表面がざらついていることも種子の発芽、成長を助けていると考えられる。

植生——土が少ないため本来なら大きくなるヒサカキ、トベラ、ススキなども全体的に成長が悪く、ノジギクの成長を妨げるほどには至っていない。この地は a 1 地点に比べてセメントを吹きつけてからかなり年数がたっている。そのため見られる種も多く、本来なら樹幹に着生するポウラン、岸壁に着生するイワヒバが生育している。

見られる植物——木本

ヒサカキ、オオイタビ、マルバウツギ、ヤブイバラ、アケビ、トベラ、ヘクソカズラ、コフジウツキ、カンコノキ、イヌビワ、ノブドウ

草本

ススキ、イワヒバ、ボタンボウフウ、オカルカヤ、カニクサ、マメズタ、オニヤブソテツ、アブラススキ、ヒメアブラススキ、ポウラン

・土の場所

b 1

地形——南西に面した道路脇の土手で、上の方は耕作地となっており、高さ 2 m 程とあまり高くないが、日当たりが良く土も肥えている。幅 3 m について調査した。

植生——生育している植物の成長状態が良く種類も a 1, a 2 に比べてはるかに多い。木本の幼木やススキ、ヨモギ、チガヤなどノジギクより背の高くなる植物も多いが、道路脇のため大きく成長すると人の手により刈り込みが実施されている。そのため、萌芽力の弱い植物は成長が大いに阻害される。しかし、萌芽力の強いノジギクにとっては大した障害ではないようである。一方花が美しいことが知られているため、ノジギクだけ刈り残されることも多い。このことは笠沙町でのサマツノギクやシマカンギクが道路脇で大きな株が形成されているのと同じである。道路が閉鎖されない限りこの地のノジギクは群落を維持していくものと考えられる。

見られる植物——木本

ビナンカズラ、イヌビワ、ヤブイバラ、ナワシロイチゴ、ノブドウ、マルバウツギ、サルトリイバラ、ナワシログミ（幼木）、ネズミモチ（小）

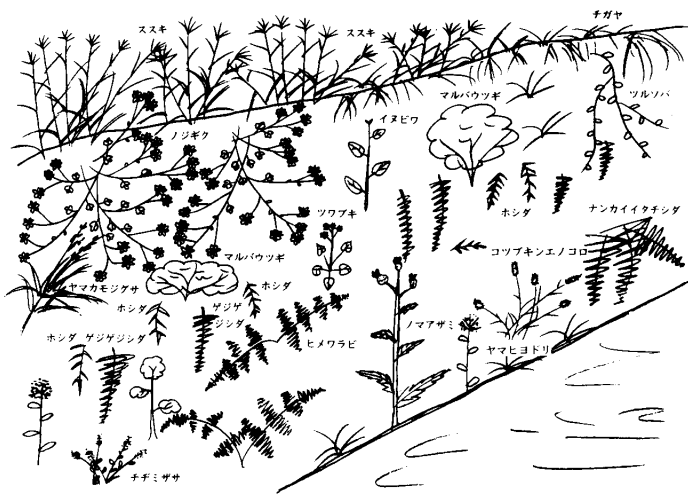


図 6 b 1 地点の群落のスケッチ

草本

ツワブキ、チガヤ、ホシダ、ゲジゲジシダ、ヤマカモジグサ、ヒメワラビ、ススキ、ノマアザミ、コツブキンエノコロ、イヌタデ、ヨモギ、センニンソウ、ヒメジソ、ツルソバ、ヤマヒヨドリ、オニタビラコ、ナンカイイタチシダ、チヂミザサ、ヒキオコシ

b 2

地形——緩やかな斜面の耕作地に茶畑が広がっており、この茶畑の上下境は2.5m程あり20~30m続いている。このような部分が割と多く幅2mを調査した。

植生——コフジウツギ、イヌビワ、ナンバンキブシなどの林縁に多く見られる低木が生え、スイカズラ、ヘクソカズラなどのつる植物がとりついている。その下にススキ、ツワブキ、シダ植物と多くの種が混生している。木本は枝を伸ばすと茶畑に影響が出てくるため、幾度となく枝切りが行われている。草本類もまた同様である。

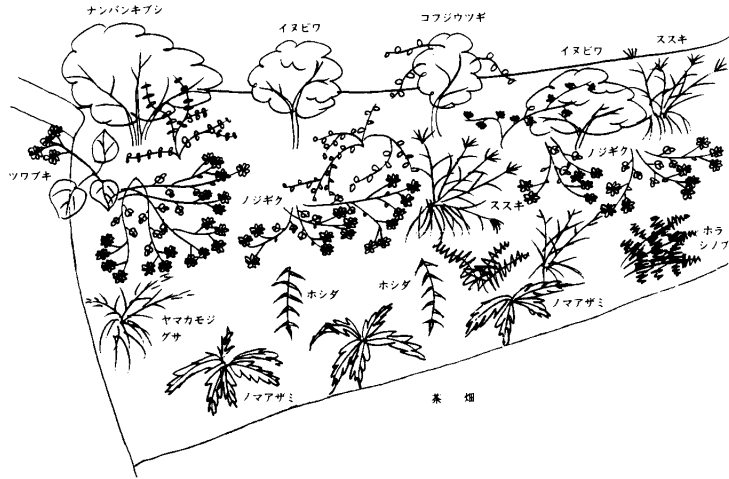


図7 b 2地点の群落のスケッチ

見られる植物——木本

コフジウツギ、イヌビワ、スイカズラ、ナンバンキブシ、ヘクソカズラ

草本

ツワブキ、ススキ、ノマアザミ、ホラシノブ、タチシノブ、ヤマカモジグサ、オオイタチシダ、ホシダ、カニクサ、アシボソ、アカネ

3. まとめ

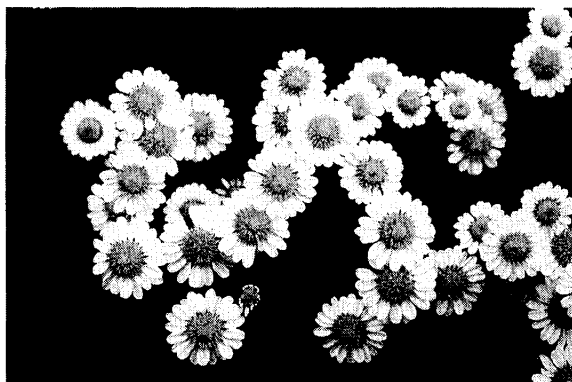
今回の調査は、分布域の広いノジギクについてのごく一部の解明でしかない。ノジギクと混生する種の調査により共通性を明らかにしようとしたが、不十分であった。ノジギクと共存しながら競争種となるものを今後も見ていきたい。その上主として内陸部での生育環境に重点を置いたので、海岸線沿いでの調査を今後も引き続き進めていくつもりである。

- (1) サツマノギクの自生が海岸線から500m以内であったのに対して、ノジギクはB地点付近で5km強もありかなり内陸部まで入り込んでいる。
- (2) 生育地のほとんどが人の手によって作り替えられた自然や、人の手が定期的に入る場所である。このことは、他の植物にとって生育条件の厳しい海岸線に似た状況を人が作ったためにノジギクが侵入していったものと考えられる。
- (3) 耕作地の境や道路脇の土手など土の多い場所の株は大きいですが、セメントの石垣や吹きつけに生えているものは貧弱である。ノジギクにとって土の多い地に根をおろすことが最も良いこと

はいうまでもないが、そのような場所は他の植物にとっても好適地のため、背の低いノジギクは競争に負けていく。必然的に自然環境の厳しい地が生育地となっていくと考えられる。海岸線ではそのような環境が長く維持されるが、その他の地では環境が変化し生育地が移り変わっていくものと考えられる。

4. 参考文献

- ・初島 住彦, 1986. 改訂鹿児島県植物目録: 169-170. 鹿児島県植物同好会
- ・初島 住彦, 1991. 北琉球植物誌: 148. 朝日印刷書籍出版
- ・下斗米直昌, 本邦産菊属野生種の分布について [1]: 899-909
- ・宮脇 昭・奥田 重俊, 1990. 日本植物群落図説: 354. 至文堂
- ・佐竹 義輔, 1981. 日本の野生植物Ⅲ (Ⅲ) 164-167. 平凡社
- ・奥山 春季, 1984. 原色日本野外植物図譜 3(3) 1-532. 誠文堂新光社
- ・立久井昭雄, 1991. 鹿児島県立博物館研究報告 (第10号): 32-37



大野岳麓のノジギク



石垣上部に生えるノジギク



土手に生えるノジギク



茶畑境に生えるノジギク